射水

IMIZU

奉祝 式年大祭・臨時大祭 斎行

射水神社社報 第25号

式年大祭の神輿渡御

こころの拠り所、元気の源として

射水神社宮司
松　本　正　昭

崇敬奉賛会員はじめ、ご崇敬の皆様におかれましては、愈々、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

常日頃、当神社の御神徳の宣揚・護持運営にご協力を戴いておりますこと、深く御礼申し上げますとともに、今年も宜しくお願い申し上げます。

昨年は、当神社「式年大祭」斎行の節目の年に当たり、殊に月日の経過が早く感じられた年でありました。

当神社の式年大祭は、歴史上、様々な状況下で斎行されて参りました。

明治八年、かつての鎮座地である二上山麓を離れ、現鎮座地の高岡城本丸跡地に遷座されて以来、大正十三年の遷座五十年祭にはじまり、昭和九年に六十年祭、七十年祭に当たる昭和十九年には戦時下で斎行することは叶いませんでしたが、国幣中社として官民一体となり斎行されて参りました。

そして、戦後、占領下の神道指令を受けて国家管理を離れ、宗教法人として再出発したものの、氏子の無い神社の荒廃は甚だしい状況にありました。

しかし、地域の〝こころの拠り所〟としての神社への崇敬の念は消え失せることなく、射水神社を護持しようとする多くの崇敬者の篤い真心のもとに奉賛会が設立されました。

以来、町々村々の復興とともに、奉賛の誠が捧げられ、昭和二十九年に八十年祭、昭和三十九年には九十年祭、そして、日本経済上昇の中で行われた昭和五十年の鎮座千三百年・遷座百年祭では、畏くも天皇陛下より幣帛料を賜り、元の鎮座地である二上の地への渡御祭をも執り行い、賑々しく斎行されました。

この式年祭に伴い、玉垣造成・社務所移設等の記念事業が完遂され、神社としての輪郭が整えられて参りました。その後、百十年祭・百二十年祭と三十年間は中断しておりましたが、平成十七年に百三十年祭が復活し斎行され、十年後の昨年九月、鎮座千三百四十年・遷座百四十年の式年大祭として、九月二十一日から二十三日に亘り、稚児社参・神賑行事・神輿渡御・式年大祭慶賀祭を斎行することが出来ました。

昨今の参拝状況を踏まえ、手水舎の移設建設と境内整備、老朽化に伴う本殿屋根修繕等を記念事業として完遂することが出来ました。これも偏に、崇敬奉賛会員各位をはじめ、崇敬者各位、各企業から目標を上回る浄財を寄せられたお蔭であり、赤誠に深甚なる謝意を表し、心より厚く御礼を申し上げます。

また、この式年大祭の節目の年に当たり、時恰も、伊勢の神宮より鳥居を拝受し、四月に多数の奉仕者を得て、鳥居の笠木を奉曳し、実に八十六年ぶりに拝殿前へ再建されました。

さらに、十月には全国豊かな海づくり大会に天皇皇后両陛下が富山県に行幸啓遊ばされるに際し、幣饌料の下賜があり、幣饌料奉奠奉告大祭を臨時大祭として斎行申し上げましたことは、千載一遇の慶びであります。

我々神職は、御神威の発揚・奉護を使命とするところであり、日々の祭りを通して、節目、節目の式年大祭をその状況下において継承して行かなければなりません。

そのためには、常日頃、神社が地域社会の中で、生き生きとした人々の〝こころの拠り所〟〝元気の源〟として在り続けられるよう、そして、この度の式年大祭を足掛かりに、さらなる御神徳の宣揚に努めて参りたく思う次第であります。

皆様には、倍旧のご崇敬、ご協力をお願い致します。

此の年が、皆様にとりまして、ご健勝で良き年になりますよう、ご祈念申し上げます。

新たな発展の時を迎え

崇敬奉賛会総裁
橘　慶　一　郎

昨年、平成二十七年は、二上山麓への御鎮座千三百四十年、高岡城本丸跡への御遷座百四十年の節目に当たり、式年大祭並びに記念行事を企画、挙行致しました。幸い、天候にも恵まれ、穴田甚朗崇敬奉賛会長、荻布精一実行委員長はじめ、皆様のご尽力により、神輿渡御・稚児社参など諸行事は、多くの市民と県民の参加を得て成功裡に終えることが出来ました。

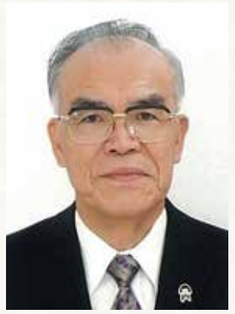
また、伊勢の神宮外宮の鳥居を拝受して拝殿手前に再建し、手水舎を新築するなど、社域も計画通りに整備出来ました。これも皆様の篤志の賜物と厚く御礼申し上げます。

折しも北陸新幹線が開業し、古城公園も国の史跡に指定されるなど、射水神社の御神威が発揚される中、高岡の街も新たな発展の時を迎えております。なかでも、神社を訪れる若い方々が増えており、結婚式・七五三参りなど、家族の幸せを願って参拝される姿を嬉しく思います。

本年も松本正昭宮司のもと、射水神社のますますの隆盛を願い、その御神徳を得て、地域が栄える一年となるよう、崇敬奉賛会役員、会員の皆様とともに努力して参ります。

この一年の、国、県、また、高岡の町々里々の弥栄と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

さらなる御神威の発揚に



崇敬奉賛会会長
穴　田　甚　朗

平素は射水神社崇敬奉賛会に対し、多大なご支援とご協力を賜わり、誠に有難うございます。何卒、本年も宜しくお願い申し上げます。

顧みますれば、当神社は昨年、慶賀の節目の年でありました。予て計画していました御鎮座千三百四十年、高岡城本丸跡への御遷座百四十年の式年大祭（慶賀祭・神輿渡御・稚児社参・神賑奉納行事等）が、秋晴れの快晴のもと、九月二十一日から三日間に亘り盛大に賑々しく斎行されました。

また、境内手水舎新設・旧手水鉢翼廊内移設等の記念事業は、計画通り完遂し、さらに伊勢の神宮より式年遷宮に伴い古材となった外宮板垣北御門の鳥居を拝受し、拝殿前に立派に建立されました。

このように節目を飾るに相応しい式年大祭の諸事業が万端滞りなく実施出来ましたことは、崇敬奉賛会会員各位はじめ、崇敬の念篤き皆様方の物心両面にわたるご奉賛の賜物であり、改めまして感謝と御礼を申し上げます。

お蔭様で越中総鎮守一宮としての風格と輪郭は少しずつ整って参りました。折しも鎮座する古城公園が高岡城址として国史跡の指定を受け、北陸新幹線も開業二年目を迎え、県内外はもとより、外国からも沢山の参拝者が訪れております。

当神社の新たなる発展に向け、さらなる御神威の発揚に努め、併せて崇敬奉賛会会員各位、そして皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げ、ご挨拶と致します。

幣饌料を外陣に奉安

御神楽「浦安の舞」

幣饌料と列立する神職ら

天皇皇后両陛下 富山県行幸啓に際し、幣饌料を賜る

四十六年ぶりの臨時大祭「幣饌料奉奠奉告大祭」を厳かに斎行

天皇皇后両陛下には、全国豊かな海づくり大会への御臨席と地方事情御視察のため、十月二十四日から二十六日の間、富山県へ行幸啓遊ばされました。

この全国豊かな海づくり大会と、国民体育大会・全国植樹祭は、皇后陛下を伴われての行幸のため、三大行幸啓ともされ、富山県へは平成十二年の国民体育大会以来、実に十五年ぶりの御来県となりました。

当社における皇室の御崇敬は、近時では昭和五十年、御遷座百年の式年大祭に際し天皇陛下よりの幣帛料、また昭和四十四年の全国植樹祭に際しての幣饌料以来のことなります。

尚、平成十二年の行幸啓は、折しも香淳皇后の御不例期間中のため、幣饌料についてはお取り止めになれたことから、実に四十六年ぶりの臨時大祭の斎行となり、今上陛下と皇后陛下よりの幣饌料は初めてとなりました。

臨時大祭に先立ち、十月十七日の神嘗祭遙拝・奉祝祭に併せて、天皇皇后両陛下富山県行幸啓奉告祭を斎行。

同月二十四日の午後、行在所であるANAクラウンプラザホテル富山に宮司が参向し、幣饌料を拝受。お清めの秋雨の降る午後六時より祭典を斎行。新調された雲脚台に載せて辛櫃に納められた幣饌料は、古例に倣い祝詞舎に据えられた後、禰宜によって本殿階下の案上へ置かれ、宮司より本殿内に奉安されました。

そして、幣饌料の由を奉告し、聖寿の萬歳と全国豊かな海づくり大会の成功、富山県下一円の水産業をはじめとする諸産業の振興と県民の弥栄を祈る祝詞が奏上されました。

また、この度の行幸啓を記念して、島憲誠理事より国歌「君が代」に歌われる「さざれ石」一対、株式会社高岡水産物市場より庄川産の雌雄の鮭一対、昆布商である株式会社室屋より昆布などが献納されました。

日月像旛と萬歳旛

玉串拝礼

幣饌料の納められた辛櫃は祝詞舎へ

旧中門に供された庭積神饌

幣饌料とは、陛下の思召しを以て、行幸先の都道府県に鎮座される旧官幣社・国幣社・別格官幣社と指定護国神社に供され、当社は国幣中社としての旧社格により拝受致しました。

御鎮座千三百四十年 御遷座百四十年 式年大祭

十年に一度の式年大祭は九月二十一日から二十三日までの三日間に亘って、秋晴れの好天の下、斎行されました。

和泉元彌師らによる神前奉納

初披露となった野点所「八照」(旧手水舎)

新手水舎にて手水を受ける稚児ら

御神楽「人長舞」

御神楽「浦安の舞」

境内特設舞台での「勧進狂言」

舞楽「蘭陵王」

元気よく到着する稚児社参の一行

九月二十一日

秋空の下、盛儀を祝う 奉納行事で境内にぎわう

稚児社参は、御旅屋通り商店街を出発し、奏楽に合わせて、社名旗や記念旗、猿田彦を先頭に稚児の行列が華やかに市内を練り歩きました。

行列には、獅子魂プロジェクトのメンバーが天狗装束と紋付袴姿で社伝の黒と白の獅子頭を手に供奉し、稚児の災厄を祓い、健やかな成長を祈って、越中の祭礼の代名詞でもある獅子舞「獅子噛み」を初めて奉仕いただきました。

当初の申込予定数を大幅に超え、特製破魔矢を手にした三百五十名の稚児は元気よく、駐春橋を経て、参道を進み、二千人を超える参拝者で境内が溢れました。

境内特設舞台では、富山県立高岡商業高等学校吹奏楽部約七十名による奉納演奏として、ディズニーやジャズの定番曲が軽快に披露され、午後からは射水雅楽会による雅楽奉納があり、管絃「平調音取」「越殿楽」「陪臚」、御神楽「人長舞」「浦安の舞」、舞楽「蘭陵王」が奉奏されました。

また、社殿では茶道裏千家淡交会高岡支部が「供茶之儀」を奉仕し、濃茶・薄茶を神前に献供。引き続いて、境内奥に移築された旧手水舎で拝服席が設けられ、新たに野点所として初披露されました。

さらに、狂言和泉流二十世宗家和泉元彌師、加賀藩前田家お手役者・和泉流職分筆頭・十世三宅藤九郎師、史上初女性狂言師和泉淳子師他、宗家直門弟子による狂言小舞「御田」「若松」「鶴亀の舞」、狂言「舟ふな」が社殿祝詞舎で奉納され、午後六時より境内特設舞台で、記念事業の奉賛者をお招きしての「勧進狂言」として、和泉流宗家による狂言「萩大名」「痺」「寝音曲」が演じられました。ユネスコの世界無形遺産にも指定される狂言の歴史、見どころや演目の解説を交えた紹介もありました。

古式ゆかしく市内を神幸

九月二十二日

午前六時三十分より発輿祭を斎行。十年ぶりの盛儀を見守る参拝者数多の中、各奉仕員に威儀物が授けられ、覆面・手袋姿の宮司が御分霊を神輿に奉遷、出御となりました。

本神幸に際しては、旧儀に倣い、大手町神明社より四十年ぶりに神輿を拝借、また下村加茂神社の野上宮司のご配意で射水市下村馬事公園より流鏑馬に使用される馬二頭を拝借し、騎馬による供奉が昭和二十九年の遷座八十年祭以来、六十一年ぶりに再興されました。

駐春橋から市内を神幸し、「先宮」として当社所縁の熊野神社に入り、御旅神事を斎行。それから二上橋を渡り、末社である諏訪社、摂社の院内社、正午には旧社地である二上射水神社に著御し、各社にてそれぞれ御旅神事を執り行い、旧来からの氏子総代等が玉串を奉り拝礼しました。

また、摂社である二上山頂第一の峯「奥の御前」の日吉社と、第二の峯「前の御前」の悪王子社の両社へは、宮司が車輌にて参向の上、巡拝しました。

午後一時半に二上を出立し、神幸途次の木町神社では、上田宮司と当社宮司が神輿前と本殿で同時に玉串を奉る拝礼が初めて執り行われました。

その後、高岡商工会議所・大和高岡店前で御旅神事を行い、御旅屋通りから大手町神明社では鳥居前にて拝礼。古城公園大手口より入り、末社の高岡市護国神社を拝礼して、午後六時に還幸となりました。

神輿渡御は十年前の式年大祭で三十年ぶりに再興された神事で、当社が長らく鎮座し、所縁深い二上山に鎮座の摂末社等を巡拝して、その地縁を確認し、崇敬者との神縁を結びつつ、さらなる御神威の発揚を願うという極めて重要な意義があります。

二上射水神社

熊野神社

摂社・院内社

御旅神事

発輿

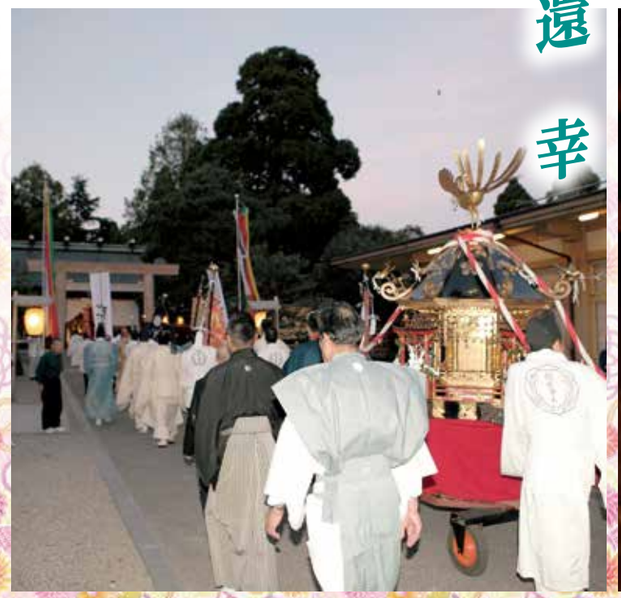
神輿を祓う神職

背後は二上山

市街地を神幸する一行

大和高岡店前

還幸



殿内へと参入する宮司

神幸の列次

前導
多田隼人
広上神社禰宜

大麻
野上裕樹
加茂神社禰宜

猿田彦

社名旗
威儀物

伶人

道中
荷太鼓

源太夫
獅子
神社役員

獅子噛
獅子魂プロジェクト

前行神職
宮﨑慎一
熊野神社宮司
平尾　賢
日枝神社権禰宜
上田正宙
有礒正八幡宮・木町神社宮司
宮川健三
大手町神明社宮司
（浦　泰宏
有礒正八幡宮権禰宜）

炭谷禰宜
神輿
武内権禰宜

宮司（騎馬）
崇敬奉
賛会長（騎馬）
神社
役員
諸員

神輿渡御 神幸路（北日本新聞 平成27年9月20日掲載、一部）

往復路ともに騎馬と徒歩による公道の神幸となり、関係官公衙との調整、書類提出には末広開発株式会社の全面協力のもと、沿道各町会、各店舗、射水神社奉仕会、いみづ協賛会、各崇敬者各位より誠心、ご協力頂きましたことあらためて篤く御礼申し上げます。

神社殿衛	高澤正紀箭代神社宮司
神社殿衛	嶽権禰宜
御旅舗設	田中権禰宜
供奉・巫女舞	高辻巫女

御神幸の意義
―神人一和のこころ―

高岡大火から二年経った明治三十五年の九月、旧社地である二上山麓への御神幸が初めて行われた。

大火によって類焼した社殿の再建を見事に果たした保科保宮司が、同年三月二十八日付で小倉久富山県知事に宛てた文書には「本社ト氏子トノ間、自カラ疎隔ノ姿ニ相成、遺憾ニ堪ヘス」として「今回御社殿新築竣工ノ上ハ遷坐式挙行ニ付、之ヲ好機トシテ旧社地二上村分社へ神幸（即日還幸）之例ヲ肇メ度」と見え、さらに「旧社地へ神幸相成候者、氏子モ歓迎シ奉リ、大ニ神慮ニ叶ヒ、永ク神人一和ノ基ヲ啓キ」と記している（『公文類集』遷坐式）。

当日の様子について、『公文類集』遷坐式に、

行列ハ奏楽ノ清調ニ従ヒ肅ニ歩武ヲ進ム、金鳳高ク翔リ神輿日ニ輝ク、青龍ハ雲ヲ凌キ、白虎ハ風嘯クノ勢アリ、供奉ノ神職衣冠厳然威儀斉壮タリ、知事宮司等騎乗五六。余ハ皆徒歩ス列外諸員幾百人、腕車八十輛ノ多キニ至ル

とあり、華麗雄大、且つ大規模な神幸であったことが窺える。

本神幸は、神と地域の人々がこころ通わせ、平和と繁栄とを祈る重要な神事である。

神恩に感謝、式年の大御祭を斎行

九月二十三日

午前十時より斎行された式年大祭・慶賀祭では、宮司の祝詞奏上に続いて、恒例により、神社本庁よりの本庁幣とともに、富山県神社庁幣として麻苧が献じられ、献幣使の炭谷一彦副庁長が祭詞を奏上、橘慶一郎総裁が祭文を奏上しました。

また、大前には祭典を寿いで御神楽「浦安の舞」を奉奏し、宮司の玉串拝礼に続いて、橘慶一郎総裁、穴田会長、荻布実行委員長他役員、また来賓として村山和臣白山比咩神社宮司、県内各神社宮司、崇敬奉賛者がそれぞれ玉串を奉り拝礼しました。

祭典後、参集殿「瑞祥」と「重陽」で開かれた祝賀直会では、宮司、総裁の挨拶の後、穴田会長より感謝状が法人を代表して三協立山株式会社、個人を代表して藤川正司氏、記念事業施工業者を代表して株式会社日本建築工藝設計事務所へ贈呈され、崇敬奉賛会顧問である針山健二伏木海陸運送株式会社取締役社長による乾杯の後、清興として射水宝生会により仕舞「岩船」が演じられました。

翌日には、後日祭を厳修し、ご崇敬の皆様のお蔭をもって、この度の式年大祭を無事に終えることが出来ました。

玉串拝礼

穴田崇敬奉賛会長による玉串拝礼

参進の儀

幣帛を献じる

感謝状の贈呈

万歳三唱

記念事業

射水の大神のさらなる御神威を蒙るべく、式年大祭を奉祝する記念事業として、富山県内一円はもとより、広く全国からお寄せいただきました崇敬奉賛の赤誠のもと、左記の諸造営が行われました。

本殿屋根・千木・鰹木・鞭掛［改修］

一昨年の春の大風により鰹木が落下、前回の修繕より相当期間を経過していることから、鰹木六本全ての本体・銅板包みともに新しくしました。

木口部分の菊花御紋の錺(飾)金具には、改めて金箔押しが行われ、今回の修繕に際して「明治三十五年　高岡魚商組合　作人 加納弥平　十二枚之内」「昭和三十八年九月　十二枚之内」との銘文と、無銘の三種類が混在して使用されていることが確認されました。

千木も内部が腐食していたため、木質部分を修繕し、取付けを行いました。

本殿屋根改修

鞭掛

手水舎・手水鉢［新築・新造］

設計は戦前の内務省神社局の流れを組み、神社本庁内に事務所を構える株式会社日本建築工藝設計事務所に依頼、建築は当社御用達の宮大工である森田建設株式会社、手水鉢は山岡石材工業株式会社、銅板葺の屋根は有限会社佐野金庫板金工業、井戸掘削は株式会社カイハツ、電気は株式会社開進堂がそれぞれ施工しました。

修築した千木と鰹木

平成二十六年十一月十三日、記念事業起工奉告安全祈願祭・地鎮祭を斎行［既報］。翌年三月二十六日の立柱上棟祭では、神籬脇に棟札・振幣・遣鉋・掛矢が置かれ、祝詞奏上の後、工匠長の五代目森田市五郎氏（森田建設株式会社社長）により「上棟の儀」が進められ、工匠らによって「清鉋の儀」「丈量の儀」があり、「結綱の儀」では参列者全員で棟木に結んだ白布を引き、「槌打の儀」が古式に則り執り行われました。

六月五日、手水舎竣工奉告祭では、「清祓の儀」「通水の儀」、また「手水初め」が行われ、参列者に真新しい手水舎で手水をお受けいただきました。

総重量6.2ｔの手水鉢

手水処［増移設］

これまでの手水鉢は、明治八年の御遷座に際し、木舟町の奉納、朋信社の周旋による「青戸室石」製です。戸室石は金沢の戸室山より産出され、藩政期において前田藩では「御留石」或いは「殿様石」とも言われ、藩主や上級武士のみが使用を許された銘石です。

拝殿と参集殿をつなぐ翼廊を増築、手水鉢を移設し、貴賓や団体参拝時の手水処として増設しました。

竣工した手水処

従来の約二倍の規模となり、団体参拝時や初詣に際しては一度に十八名の手水が可能となりました。手水鉢は茨城県産の銘石「やさとみかげ」製の総重量六．二トンで、手水鉢としては国内最大級の一枚岩とのことです。

また、地下七十メートルの水脈から井戸水を汲み上げ、保健所による二度の水質検査では、飲用にも適した極めて良好との結果でしたが、当局のアドバイスにより、滅菌機器も使用し、定期点検を実施、常に清浄な水が満々と湛えられております。

立柱上棟祭　結綱の儀

翼廊の増築工事［基礎］

翼廊の増築工事［建方］

石工事

境内整備［移設・新造］

大鳥居脇にあった国旗掲揚塔（奉納：島谷為次氏）を境内に移設し、飛騨石で石垣を修築、車輌用の参入退出道を新たに整備しました。参道を横切ることなく車輌が乗り入れられるため、徒歩での参拝者の安全確保へとつながります。

また、これまでは神社の祭日のみに国旗と社旗が掲揚されていましたが、このたびの移設により、毎日、社頭に国旗が掲揚されることとなりました。

曳家による移設

野点所「八照」［移設・再利用］

大鳥居脇の寄棟造りの手水舎は、曳家工法により後方の包丁塚脇に移設、傍らにある楓の大樹や、小笹などの植生を活かして野趣の風情ある野点所となりました。

これまで明治八年銘の手水鉢が据えられていたこと、また御神威が遍く八方を照らされるとの意から、野点所「八照」と命名され、式年大祭では裏千家淡交会高岡支部により呈茶席が設けられ、初披露されました。

通常は、境内を一望できる参拝者休憩所として利用いただけます。

野点所（参拝者休憩所）

国旗掲揚塔の移設

車輌用参入退出道の整備

飛騨石により修築された石垣

杜の景色

祭事暦（下半期）

8月15日　土俵祭
8月27日　諏訪社例祭
9月16日　御遷座当日祭
9月21日　稚児社参
　　神賑奉納行事
9月22日　神輿渡御
9月23日　式年大祭・慶賀祭
9月27日　院内社秋祭
9月28日　日吉社秋祭
10月1日～11月30日　七五三まつり
10月8日　高岡市護国神社
　　秋季例大祭
10月17日　神嘗祭遥拝・奉祝祭
　　行幸啓奉告祭
10月23日　さざれ石奉納
　　奉告清祓式
10月24日　幣饌料奉奠奉告大祭
11月3日　明治祭
11月15日　蒲鉾昆布奉献祭
11月23日　新嘗祭
12月22日　冬至祭
12月23日　天長祭
12月25日　煤拂祭
　　神符守札奉製入魂祭
12月29日　年越大祓
12月31日　除夜祭
毎月1日　朔日祭・23日　月次祭

煤拂祭

新たに発見された「射水神社祭日表」に基づいて、一昨年再興されたお祭りで、一年間の煤を払い、除災招福の祈りを捧げます。

年の瀬間近の十二月二十五日、社殿での祭典後、宮司はじめ神職・巫女が四メートル程の忌竹を持ち、本殿や拝殿の諸殿舎と、初詣時に古城公園の玄関口となる駐春橋を払い清めました。

特に伊勢の神宮から特別に頂戴した鳥居と、昨年六月に完成した手水舎では、初めての払い清めとなりました。

煤を払う神職

蒲鉾昆布奉献祭で成長を祈願

「七五三」の日である十一月十五日は「蒲鉾」と「昆布」の日でもあります。

蒲鉾は、永久三年の文献に祝膳品目の一つとして初めて見え、本年、九百年を迎えました。

また昆布も古くから縁起の良い食べ物とされ、蒲鉾とともに富山県の婚礼や、祝い事には欠かせません。

全国豊かな海づくり大会の開催を奉祝するとともに、未来を担う子供達の健やかな成長を祈願して、高岡の「天野屋蒲鉾店」と「室屋」より、それぞれ献納され、大前に供えられました。

奉献された蒲鉾と昆布

神青会員が初めて奉仕　高岡市護国神社　秋季例大祭

十月八日に斎行された高岡市護国神社秋季例大祭では、県神道青年会員が初めて祭員として奉仕し、前導や辛櫃奉舁をつとめました。

県の神道青年会では、「英霊顕彰」を活動方針の主軸の一つとしており、大東亜戦争終結七十年という節目の年に当たり、初めて実現しました。

次世代へ歴史を語り継ぐとの使命を果たすべく、英霊への感謝と追悼の誠を捧げ、奉仕申し上げました。

菊花御紋覆布のかけられた辛櫃を舁く神青会員

戦後七十年　明かされる歴史 〜軽巡洋艦「神通」〜

久野潤氏が調査の為、参拝

十一月三十日、歴史学者で、大阪国際大学講師の久野潤氏が参拝され、著書である『帝国海軍と艦内神社』（祥伝社　平成二十六年六月刊）を奉納いただきました。

久野氏によると、国防の任にあたる軍艦には、神社のご祭神の分霊をいただいて艦内に祀る習慣があり、これを「艦内神社」と称しています。

そして、艦内神社には艦名にゆかりのある神社、或いは河川名に由来する軍艦は、流域内の神社から分霊を受ける場合が多かったようです。

今回の調査では、軍艦が竣工した当時の社務日誌などの記述によって明らかとなる歴史もあることから、大正期から昭和期にかけての「参拝者芳名録」をご覧いただき、歴代の神通艦長はじめ、副艦長、乗員の芳名が新たに確認されました。

宮司と対談される久野氏

「神通」が当社ご祭神の分霊を奉斎か

神通について前述の著書の中では「分霊元不明」と記されており、その後の調査が進展し、当初は皇大神宮をお祀りしていたことなどが明らかになっています（「瑞垣」第五号　昭和七年刊）。

更に、『有終』（第十四巻　第十二号　昭和二年十二月）の「我軍艦に於ける祭神の由来―其の六、軍艦神通」項には、

一、祭神の名
　　二上の神、又の御名天牟羅雲命
一、由　来
　艦名と同名の神社を物名したるも無かりし為め、同名の神通川の所在地附近に於て、最も霊験顕かにして其の社格高き射水神社を奉祀し、射水艦内神社と命名したるが、昭和二年一月十五日之を神通神社と改名したり。

と見え、神通川に因んで命名された軍艦「神通」は、同名の神社を見つけられず、当社の分霊を奉祀したとあります。

同氏によれば、県からの推薦により、神通川流域でなくとも、国幣中社として越中国を代表する当社の分霊を祀るようになったのではと推考されています。

七十数年の時を超えて、あらためて軍艦「神通」と神社が繋がろうとしています。

奉納を記念して

軍艦「神通」の絵葉書（当社蔵）

◆神　通
大日本帝国海軍の軽巡洋艦。大正十一年八月神戸川崎造船所で起工。大正十二年十二月進水。大正十四年七月竣工、就役。昭和十八年七月戦没。この間、水雷戦隊の旗艦としての任をよく果たした。

「あけぼの敬神講と私」

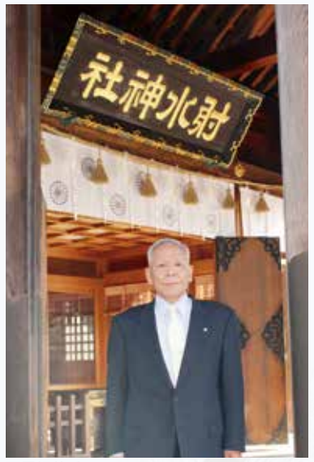
あけぼの敬神講　講員　石黒輝義

射水神社鳥居前には敬神講の奉納によって、明治四十四年九月に建立された立派な社号標があります。

敬神講は明治二十三年、高岡市助役の江守又一氏の主唱で射水神社の祭礼の淋しきを嘆じ、その後援として設立されました。代々の高岡市助役を講長と戴き、大正十二年八月改正の国幣中社射水神社敬神講規約によると、当初は「射水神社敬神講」と称しており、現在は改称されて「あけぼの敬神講」となっています。

また大正十三年十月に高岡市教育会より発行された『高岡市民読本』には、次のように記載されています。

我が日本は、神の創建せられた神国である。我が民族は、皆其の神の子孫であるとの民族的信念が基礎となって、自然に敬神崇祖の国民的大精神が養はれ、之れが形に現はれて、神社の建設ともなり、祭祀の式典ともなってゐるのである。故に我が日本全国、苟も国民の住する地ならば、どんな僻陬の小部落でも、鎮守の社を見ない所はないのである。我等は我が郷土に鎮座の神社に就いて、其の由緒沿革の概要を知り、益々深くこれを崇敬せねばならぬ。



石黒輝義氏

これが正に敬神講の根本精神であると思います。

私事で恐縮ですが、敬神講入講のきっかけは、二つあります。

まず、母方の親戚筋が既に入講しており、色々話を聞いたこと、そして私が四十二歳の頃に妻、母親、子と次々に入院し、当時、射水神社禰宜であった屋舗直彦氏に相談したところ、「信心」との言葉を授かったためです。

その意味は「何でも良いから信じること。毎月一日と十五日をお参りの日と決め、早朝より参拝することで色々な悩み事が小さいことと思えるようになり、もっと大きい希望が湧き、仕事も楽しく、挑戦意欲が出てくる」というものです。

お蔭さまで常に感謝の気持ちを忘れず、今日まで過ごすことが出来、有難く思っています。

敬神講が出来、既に百二十六年。〝敬神の心〟が脈々と今日まで続き、どれだけ多くの人々の心を安らいできたのかを考えると、敬神講の存在は大変有難く考える者の一人です。

ぜひ、毎月一日と十五日の朝六時三十分よりお祓いがありますので、参加されて清々しい気持ちになっていただけたらと思います。心からお待ち申し上げております。

大鳥居前の社号標（昭和初期）

ご奉納

慶賀に堪えない一年となった本年も多くの奉納品が寄せられました。茲に深く感謝申し上げます。
尚、何れも奉納奉告祭を斎行し、当神社にて永く後世へと伝えて参ります。

・萩　弐拾株
狂言和泉流二十世宗家　和泉　元彌

・さざれ石　壱対
島　憲誠

▲奉納奉告清祓式を奉仕して

・初代畠春斎奉納
菊花御紋茶釜［修繕］　壱口
畠　春斎（第三代）

▲菊花御紋茶釜

▲衝立と結界

・衝立　壱基
・結界　壱基
戸田　治

・『帝国海軍と艦内神社』　壱式
久野　潤（歴史学者）

（祥伝社　平成二十六年六月刊）

・式年大祭写真　壱式
松原　幸夫
泉田　幸夫

▲松原幸夫 撮影

▲泉田幸夫 撮影

・輪島塗御盆　壱枚
株式会社 文化店
御盆の絵は、生涯を通じて赤誠を捧げられた同店代表の北村麗子氏が描かれました。

▲輪島塗御盆

・オイルレスミニコンプレッサ　壱台
匿名

▲オイルレスミニコンプレッサ

（敬称略）

献灯「吊燈籠」ご奉納のお願い

神社の社頭風景を特徴づけるものの一つに燈籠があります。
屋外で見られる石造の大きなものが一般的ですが、廻廊に金属製の吊燈籠（釣燈籠）が並べられるなど、その素材や形態はさまざまです。
当神社と致しましては、さらなる御神徳の昂揚を図り、境内の明るさを確保すべく、崇敬者（会社・個人・団体）の皆様に献灯「吊燈籠」（一基　十五万円）のご奉納をお願い致したく、茲に謹んでご案内申し上げます。
何卒ご理解をいただき、ご献灯賜りますよう、お願い申し上げます。

お問合せ　射水神社社務所
☎〇七六六-二二-三一〇四

外拝殿の吊燈籠

設置予定場所（一部）

芳名を刻み、永代にわたり神前に「献灯（みあかし）」が灯されます。

神前結婚式

平成二十七年

文月　七月挙式
中山紘太・雅子
江村雄太・彩香
若林孝仁・亜矢子

葉月　八月挙式
土肥卓思・亜矢子
石川清嗣・愛子
松木良輔・かおり
矢野健雄・真紀
門脇大士・真衣
大浜晃弘・美里

長月　九月挙式
池田昌弘・香織
御囲裕晃・七瀬
テラノフスキラファウ・知佳
高嶋一樹・華代
山崎修平・智佳
菊亮輔・沙織
西岡一憲・英吏子
小谷優太・希咲
佐野哲也・紗千
古川悟史・吏英子

神無月　十月挙式
木町大輔・安津子
神崎大輔・麻衣子
藤本慎也・香里
横山健一・栞
長谷川昌紀・真理子
池田憲聡・陽子
山崎雅朗・加奈子
中川俊彦・久美
石崎啓・秋穂
八幡剛・春香
金子努・裕子
池田義人・和美
南彰雅・玲子
板倉理人・由佳子
中村耕作・由起子
室谷貴則・望
寺島健介・奈央子
山本昌宏・里美

霜月　十一月挙式
毛利丈志・ゆりか
村中豊彦・彩
土肥雅晴・智恵美
姫野完誠・佳津子
内記一喜・菜留実
若野壮市・幸代
東雅弥・里津子
牧野瑛・清香
黒林信男・香
竹口修・淳子
瀧川泰裕・麗子
惣元茂樹・沙織
石浦雅・淳美

師走　十二月挙式
朴木肇・千晶
黒田翔太・恵奈

越中総鎮守一宮
射水神社
発行日／平成二十八年一月　発行所／射水神社　〒九三三―〇〇四四 高岡市古城一―一　印刷所／キクラ印刷株式会社
お問合せ〈社務所〉〇七六六―二二―三一〇四〈結婚式場〉〇七六六―二二―〇八〇八　URL／http://www.imizujinjya.or.jp　Eメール／info@imizujinjya.or.jp

平成二十八年 祈祷（お祓い）のご案内

個人祈祷

一、厄年祓

本厄
四十二歳 男 昭和五十年生
三十七歳 女 昭和五十五年生
三十三歳 女 昭和五十九年生
二十五歳 男 平成四年生
十九歳 女 平成十年生

前厄
四十一歳 男 昭和五十一年生
三十二歳 女 昭和六十年生
二十四歳 男 平成五年生
十八歳 女 平成十一年生

後厄
四十三歳 男 昭和四十九年生
三十四歳 女 昭和五十八年生
二十五歳 男 平成三年生
十九歳 女 平成九年生

一、身祝（男女）

還暦（かんれき） 六十一歳 昭和三十一年生
古稀（こき） 七十歳 昭和二十二年生
喜寿（きじゅ） 七十七歳 昭和十五年生
傘寿（さんじゅ） 八十歳 昭和十二年生
米寿（べいじゅ） 八十八歳 昭和四年生

一、家内安全祈願
一、商業繁栄祈願
一、合格祈願
一、安産祈願
一、初宮詣
一、その他諸祈願

◎初穂料　五千円より志
（お志により、お酒・鏡餅等をお供え下さい）

団体参拝 ※事前にご予約下さい

一、職場安全・商業繁栄祈願 等

◎初穂料　二万円より志（お酒二升をお供え下さい）

祈祷受付時間　午前九時～午後四時三十分

干支「申」の大絵馬

社殿脇の翼廊軒下に設置された大絵馬は、「NPO法人障害者アート支援工房ココペリ」によって描かれたもので、初詣期間中、一緒に記念写真を撮る参拝者の姿が多く見受けられました。

参集殿では、新春を祝う展覧会「七つの彩の祝い 申」も開催されました。

編集後記

謹んで初春のお慶びを申し上げます。

昨年は真心こもる崇敬奉賛によって、伊勢の神宮より拝受した鳥居の奉曳祭（既報）、十年に一度の式年大祭、そして、天皇皇后両陛下の行幸啓に伴う臨時大祭を恙なく執り行うことが出来、社頭がとても賑わった一年となりましたこと、誠に有難く、厚く御礼を申し上げます。

記念号となった本号から誌面のサイズがより見やすいA4判となりました。本年も内容の充実に努め、より良き社報を目指して参ります。

ご崇敬の皆様には、新たな手水舎で身を清め、お伊勢さまより賜った鳥居をくぐり、射水の大神様の御神徳のもと、本年も幸多き年とならむことを衷心よりお祈り申し上げます。

射水神社　検索